

保育カンファレンスの検討(その4) — U夫の保育事例から —

○尾形節子 榊田正子 田中三保子 吉岡晶子 伊集院理子 上坂元絵里 高橋陽子
清宮聡子(お茶の水女子大学附属幼稚園) 田代和美(お茶の水女子大学)

【研究の主題】

本研究は、保育カンファレンス(1994年度より行っている保育についての話し合い。以下カンファレンスと略す)について検討することを目的とし、継続的に行われているものである。保育カンファレンスの検討(その1)では、保育者がカンファレンスの基盤について、研究者がカンファレンスが実践研究として位置づくかについて、それぞれ検討した。そしてその意義として、「直接的に問題解決にあたるのではなく」「話題提供者の問題意識に沿う形でのカンファレンスが、ひとつの園内での個々の保育者の主体性の確立と、その結果としての共通理解の意識化に有効に機能すること」を推察した。そこで(その2)ではカンファレンスにおける一保育者の変容を、(その3)では保育者同士の連携を手がかりに、さらに具体的に検討した。(その4)では、カンファレンスの場において、話題提供者はどのような情報を得てどのような保育方針をたて、それは日々の保育の中でどのような意味を持ち得たのであろうか、という問題意識のもと、カンファレンスの検討をする。

【検討の方法】

1998年度のカンファレンスは1月20日現在で計14回。1回約2時間。参加者は9名(教頭1名、担任教諭6名、フリーの教諭1名、大学教官1名)。担任教諭や大学教官が作成した保育記録が事例として提出され、話し合われた。時には、参加者が記録なしにその日の保育のこと、最近気になっていること等を語ることによって、カンファレンスが始まることもあった。本研究では、1998年度のカンファレンスの中からU夫について話し合われたことに焦点を絞り、話題提供者である担任のU夫のとらえ、保育実践、カンファレンスの内容等を手がかりに、保育実践におけるカンファレンスの位置づけについて検討した。

<U夫について> 1998年4月入園、年中組(男女各17名。うち進級園児19名、新入園児15名)。担任は4月からこの組を受け持った。4月当初、担任は受け持ったばかりの34人の個々の把握に懸命で、U夫についての具体的な問題意識をまだ持っていなかった。ただし、保育後にそれぞれの職員から「今日U夫が来てこんな様子だった」と話題にされることが多く、U夫の行動範囲の広さを感じていた。5月のカンファレンスに提出する事例にU夫を選んだのは、園内の保育者全員が何らかの形で直接かかわっており、共通の話題にしやすいのではないかと理由による。

【経過】

(1)第3回カンファレンス 1998.5.20.

担任によるU夫の記録は前日に配布済み。カンファレンス当日、担任は「自分としてはU夫の動きをよく見てタイミングを合わせる事が大事だと思う。しかし彼に対する具体的なイメージが持ちにくく、つかみどころがない。他の先生が実際にかかわったところで、U夫についてどのように感じているのかを聞きたい。彼自身の文脈をわかりたい」との考えを伝えた。そこで参加者は、担任の記録や発言の真意が、お互いに理解できるように確かめあいながら、自由にそれぞれの考えを述べあった。

「無防備に抱きついてくるところがあり、そこが手がかり」「いつも自分のことを一番大事に考えてくれる人、望んでいることにすぐ応えてくれる人がU夫には必要」「(U夫の行為は)否定するとか肯定するというのではなく、認めていいことのような気がする。それはそれでいいも悪いもない」「大人との間で受け止めてもらって、返して、また受け止めてもらうというやりとりが少しずつできることが、U夫にはまず必要。子ども同士ではまだ難しいから」「今の時期に(U夫の行為が)ちゃんとどこかで完結させてもらえることが今後大事な事。最終的にはきつと自分の組に戻っていく。担任一人ではできないからってすませちゃうと、いつまでもクラスの一員にならない気がする」

話し合いは具体的にはこのように進行し、その中で担任は、U夫にかかわっていく上で有用な様々な情報(U夫の動き、U夫をどう理解するか、援助の方法等)が得られたと感じた。そして、「U夫の文脈の理解を心がけ、U夫のタイミングにあったかかわりをし、U夫が『やりたい』と思ったことに丁寧につきあっていく。そういう積み重ねからU夫との信頼関係を作っていこう」と自分の保育方針をあらためて確認した。

(2)日々の保育実践 1998.5.21 ~ 1998.10.15.

☆ 1998.6.26. U夫はテラスで砂と葉を使って桜餅を作っていた。同じ場所で他の組の子どももごちそうを作っていた。言葉で活発にやりとりをしている様子ではないが、お互いの視線の合わせ方・姿勢等から、場を共有している意識があるように担任には感じられた。担任・他の保育者二人が客として入れ替わりかかわりながら、その遊びは長く続き、三人はそれを「とても良かった」と保育後に語り合った。その場面を見ていた別の保育者の「一カ所にいることってU夫には大事」という言葉から、担任は「U夫がひとつの遊びを続けて

いられるような援助を心がけよう」と実感した。

☆ 1998.5.～ 1998.9. 5月に、別の年中組の担任から「今日U夫と遊んだ時に『あっち』『むこう』というのが理解できていないように感じた」との話があった。担任はその後の保育の中でU夫とかかわっていくうちに、「自分は『U夫には理解力が足りない』と思いたくなくて、彼の絵や音に対する表現力の豊かな面にばかり目を向けていたのではないか。それはかえって、今U夫に必要な援助を見落とししていることになるのではないかと迷うようになった。そこで他の保育者や大学教官（発達心理学）の意見も求め、再考し「確かにU夫は発達のには幼いところがある。だからこそ、大人との一対一の関係の中で丁寧にかかわることが必要」と再確認した。

☆ 1998.9.～ 1998.10. 幼稚園行事へのU夫の参加の仕方や母親との面談等から、「静かな落ち着いた環境」「毎日の幼稚園の生活を自分の体験として積み重ねていくこと」がU夫にとって必要であると実感した。

(3)担任によるカンファレンス記録の読み返し 1998.10.

担任は(1)の逐語録を読んだ。すると、担任が保育実践を通して自分自身で得たと思っていた保育上の実感が、既に話し合われていたことに気づき、驚いた。(例えば(2)の「U夫がひとつの遊びを続けていかれる」ことの重要性が、すでに(1)で「完結させることが大事」と表現されている)

(4)第8回カンファレンス 1998.10.15.

年長組の担任がその日の大きな出来事（V夫のこと）について語り、カンファレンスが進んでいった。V夫はU夫ともよく衝突する子どもである。V夫のことをわかろうとする過程で、「ちゃんとしなければと背伸びをしているV夫から見ると、U夫の行動は気ままに見え、腹が立つのではないか」と思うようになった。それは「U夫の行動の仕方が、他の子どもに違和感を与えるのではないか」という、自分の見落としがちな視点からU夫について考えるきっかけとなった。

(5)第9回カンファレンス 1998.10.28.

担任が、「U夫の事例をカンファレンスの場に出したことで多くの情報が得られ、彼が何に興味を持っているかとらえやすくなり、自分としてはかかわりやすくなったように思う」と語った。

(6)第10回カンファレンス 1998.11.27.

担任が、「U夫の行動範囲は相変わらず広いのだが、クラスの子どものかかわりもでてきて嬉しく思っている」と語った。この時は、U夫の様子に毎日の生活で積み重ねてきたことがとても生きているように思われて、担任の中にはあまり迷いが生じていなかった。

(7)日々の保育実践 1998.12.

この時期、U夫はまるで赤ちゃんのような振る舞いをするが増えていた。担任は「大人をひきつけておきたいとい

うU夫の気持ちの表れなのだろう」とは思いながらも、U夫の表情や仕草のあまりの幼さにもどかしさを覚え、その状況を受け止めかねていた。

(8)第12回カンファレンス 1998.12.21.

他の保育者および大学教官の記録をもとに、担任がU夫について語った。その中で「U夫は対等な関係を望んでいるわけではない。小さい赤ちゃんや人形を抱きしめたりするのは、非常に密接なかかわりを求めているということではないか」という見方を示唆された。それを聞いて担任は、U夫の行動がとても理解しやすくなったと感じた。

(9)第13回カンファレンス 1999.1.11.

担任が「『U夫は非常に密接なかかわりを求めているのだ』と思ってU夫をみてみたい。なんだかU夫をU夫のまま受け入れられそうな気がする」と語った。

【考察】ここで行われているカンファレンスは、事例の内容や提出の方法は参加者一人一人の判断に委ねられ、担任や観察者による記録が提出されたり、記録なしに事例が語られる等、保育者のその時々必要性に応じて、様々な形で進められる。参加者は記録や発言の真意等を当事者に確かめながら、その時々事例を自分の問題として受け止め、感じたこと考えたことを自由に述べ合う。その過程で参加者は、自らがもともと持っていた保育上の視点を再確認したり、新たな視点で子どもや保育を見直すことができる。カンファレンス記録の読み返しやカンファレンスの経緯の再考もまた同様の機能を持つ。U夫の事例でいえば、担任は、明確な問題意識を持たない段階で事例を出したが、カンファレンスの場で多様な情報を得、実践に取り入れることができた。また、カンファレンスの中でいろいろ考え表現してきたことが、実際の保育の場面に生かされたとも感じている。例えば、必要以上に思い迷わずにU夫とかかわる、U夫をU夫のまま受け入れられる等である。

カンファレンスという場においては、保育の場における子ども一人一人の文脈や保育者自身の気持ちを、距離を置いて考える機会が保証される。そういう機会を持つことで、実際の保育実践における判断の基準（例えば、U夫は非常に密接なかかわりを求めている）や保育方針の基になるようなもの（例えば、U夫の行為を完結させる）が保育者の中に蓄えられていく。保育者はその蓄えによって、保育方針を柔軟に選択したり再構成したりできるようになる。さらに、その保育実践の手応えが蓄えられ、カンファレンスの場で再び確かめられていく。つまり、カンファレンスが保育実践に還元され、両者が循環していくということである。このようにカンファレンスと保育実践を積み重ねていく過程が、様々な視点から子どもを理解しかかわりを工夫していく保育の営みを支えていくといえよう。